



美術館だより

岐阜県美術館

2011.5.6
No. 67

岐阜県美術館

〒500-8368 岐阜市宇佐 4-1-22 TEL:058-271-1313(代表) FAX:058-271-1315

URL <http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s27213/> E-mail:c27213@pref.gifu.lg.jp

今、美術館がなすべきこと

この号の内容

- 1 今、美術館がなすべきこと
- 2 「伊藤慶二+林武史」展 開催中!
- 3 舞台裏ノート 企画展の準備について(その1)
- 4 美術館への贈り物 熊谷守一《はま浪太》
- 5 教育普及事業 林武史さんのワークショップ「日干しレンガのピラミッド《月に吠える》をつくろう」
- 6 新収蔵作品、お披露目です

2011年3月11日の東日本大震災で被害に遭われた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

美術館の世界も今、大きく揺らいでいます。東日本の美術館は、地震による被害だけでなく、計画停電によって休館や開館時間の変更を余儀なくされ、活動に支障を来しています。また、東日本から離れた場所の美術館でも、海外から借用する作品を中心とした美術展の開催中止が相次いでいます。地震や原発事故の影響で、海外の美術関係者が日本への作品貸出に難色を示しているためです。非常に残念なことです。

しかし、このような心痛む状況だからこそ、美術館がしなければならないことがあります。それは「心の癒し」。震災によって傷ついた心のケアこそ、美術館の使命ではないでしょうか。岐阜県美術館は、制限の中でも工夫を凝らし、人々を温かく迎える空間を作り、見る人の心を明るくできるよう、館員一同力を合わせてがんばります。

TOPICS 「伊藤慶二+林武史」展 開催中!



伊藤慶二展 展示風景

企画展示室では2月22日から「伊藤慶二 ^{いとうけいじ} ころの尺度 + ^{はやしたけし} 林武史 石の舞・土の宴」を開催しています。

これは、岐阜ゆかりの現代美術のアーティストを紹介する展覧会の第3弾です。現代美術というと、「難しそう」「わからない」と思われる方もいらっしゃるでしょう。ご安心ください。今回の展覧会では、詳しく作品を解説する音声ガイドを、なんと!なんと!!無料で!!!貸し出しているのです。(ただし、企画展示室内を鑑賞する方に限定されています。) しかもこの音声ガイドは、二人の作者が、本人の言葉によって、作品の紹介や鑑賞の仕方を教えてくれるので、聞かれた方々から非常に好評をいただいています。

伊藤慶二さん(1935年生まれ)と林武史さん(1956年生まれ)は、それぞれ土岐市と岐阜市出身のアーティストです。

陶芸家の伊藤慶二さんは、全国でも最も早い時期から、美濃を中心に、やきものによる立体造形を手がけてきました。展示会場では、廃土を四角い枠にはめて焼いた「Hiroshima」シリーズから、人間の頭部を表した《面》、足を表現した《足》などの近年発表された具象の作品、さらにこれまでの集大成ともいべき、静謐な5つの新作《祈り》まで、実に多様で豊かな発想の作品群が鑑賞者を迎えてくれます。また作者の身近な日用品、器、アイデア・ノートなどを集めたアーカイヴは、伊藤作品の魅力の秘密をかいま見せてくれます。

(2 ページに続きます。)

"「伊藤慶二＋林武史」展 開催中！" (1 ページの続き)



林武史《紅の庭》《石間》(2011年)

音声ガイドを道連れに、ひとりクールに現代美術を鑑賞するもよし。体験型の作品は、ご家族揃ってのにぎやかな鑑賞も面白いですよ。ゴールデンウィークの行楽に、ぜひお気軽にご利用ください。(ただし、イベント参加には「伊藤慶二＋林武史」展観覧券が必要な場合や、事前の申込が必要な場合があります。受付、ホームページ等でご確認ください。)

3人の平成24年度企画展担当者から、展覧会へ向けての意気込みや苦労などを、短く語ってもらいました。

開館 30 周年夏「象徴派」展の準備が始まっています。急速な科学の進歩、様々な社会や価値観の変化に見舞われた 19 世紀末ヨーロッパは、まさに揺らぎの時代という感じ…その中で本質的な世界を求めたアーティストたち…100 年以上前だけど、その姿勢、なんか共感しちゃう(?!) 今日この頃です。(小山明日香)

2012年の秋は、ロシア出身で、フランスで活躍した画家の個展を担当します。このヒントでわかった方は相当の美術通！ぜひぜひ楽しみにお待ちください。(青山訓子)

30周年を迎える岐阜県美術館の活動が、今度の企画テーマです。懐かしい展覧会、そして収蔵品の数々をメモリアルに展示し、「展覧会のその後」をキーワードに、準備をはじめています。(廣江泰孝)

彫刻家で東京芸術大学准教授の林武史さんは、長年にわたって御影石による、スケールの大きな彫刻を制作しています。展示室の半分を占める代表作《水田》は、ずらりとならんだ石の群れが、遠くまでずっと緑の稲が揺れる田んぼが続いていく、記憶の中の岐阜の風景を呼び起こしてくれます。多目的ホールでは、白大理石で作られた新作《石間》と、美濃和紙のリトグラフ《紅の庭》が圧倒的な存在感を放っています。《石間》は、触れたり乗ったりできる体験型の作品なので、ぜひ靴を脱いで、ひんやりとした石の触感を味わいながら、大理石の茶室でのひとときを楽しんでみてください。また庭園には、会期中にワークショップで子どもたちと一緒に作った参加型の作品《月に吠える》もあります。

「伊藤慶二 こころの尺度＋ 林武史 石の舞・土の宴」展は、5月8日(日)まで開かれています。残りの会期はわずかですが、ゴールデンウィークは注目の催しが目白押しです。

まず4月29日(祝・金)に、伊藤さんの指導のもとにワークショップ「面をつくらう」が実施されました。子どもたちの生き生きとした顔の表現に、笑みを誘われました。

5月1日(日)には「茶会・現代彫刻との出会い」と題して、林さんの《石間》に座って、伊藤さんの器でお茶を一服できるという、実に贅沢な茶会が催されました。

5月7日(土)は会場内でチューバのコンサートが催されます。また5月8日(日)は、多目的ホールでパイプオルガンの演奏会があります。いずれの催しも、現代美術と音楽のコラボレーションをお楽しみいただけます。

ぜひ岐阜県美術館の展示室や庭園で、今を生きる二人の作家による現代美術とのわくわくするような出会いを楽しんでください。

舞台裏ノート 企画展の準備について(その1)

学芸員 青山訓子

来年度(平成24年度、2012年度)には、いよいよ岐阜県美術館が開館30周年を迎えます。この特別な年を記念して、美術館では現在3つの大型企画展を計画し、準備をすすめています。それぞれの担当者からメッセージが寄せられていますが、いずれも皆様に自信を持っておすすめできる展覧会だと思っております。

企画展の準備には時間がかかります。およそ3年前から(海外から借用する場合はさらにもっと前から)作家や作品の調査研究と、美術館や画廊、所蔵家からの情報収集、文献資料集めをスタートさせます。その成果から、最初の出品候補作のリストを作ります。こんな展覧会を開いてみたい！という学芸員の熱い気持ちが詰まった最初のリストで、「ドリーム・プラン」と呼ばれます。まさに「夢の展覧会」です。

次に、このドリーム・プランに基づいて、作品借用のお願いをはじめますが、これがまた非常に時間のかかる作業なのです。所蔵者が大切にしている貴重な作品を拝借するには、展覧会の意義を十分に伝え、快く協力してもらわなければなりません。断られることもしばしばです。交渉が失敗しても、落ち込んでいる暇はありません。次の新しい候補作品の交渉をすすめたり、追加で新しい作品を選んだり、展覧会に必要な作品の数が十分に確保されるまで、くじけず、へこたれず、駆け引きをくりぬけ、ねばり強く交渉を続けなければなりません。

(次号に続きます)

美術館への贈り物 くまがいもりかず なぶと 熊谷守一《はま浪太》

学芸員 廣江泰孝

作品名は、千葉県ふとみの房総半島にある太海海岸一体の、古い地名に由来します。外房に面したこの海岸沿いは、波で浸食された岩肌が露出しており、岩礁が多い場所です。遠浅の海からは、鱗のように波が岩場に押し寄せていますが、薄曇りの空の下、波はより白く際立って見えます。この作品は4号の小さなスケッチ板に描かれており、裏面には、作品名と共に自筆で「昭和二十六年六月」と記されています。夏に近づく日差しの下で、岩肌や磯辺がみせる形と色の面白さを絵にした作品です。

熊谷守一(1880-1977)は、若い頃から何度も同地や熱海へとスケッチ旅行をして、海岸沿いの風景を描いています。岐阜県美術館は、同地を描いた別の作品《太海》(1950年頃)も収蔵していますが、こちらは遠く水平線を視点に、絵の向こう側へと海が広がって感じられる作品です。

《はま浪太》は、遠浅の海と波打ち際を引き寄せて描く事で、波音までも感じさせるような、ダイナミックな構図になっています。岩場の複雑に入り組む様を、単純な色のかたちに置き換え、輝きとして描きました。絵にはなっていませんが、磯だまりに潜む小さな生き物たちもまた、守一にとっては興味の対象になっていたかもしれません。自然がみせる荒々しさと穏やかさの双方を、大切に描き合わせて一枚の絵に仕上げた作品です。

熊谷守一の作風において、このように両界を描き合わせる作品が登場するのは、70歳を過ぎた頃からで、はじめは風景画に見られるようになります。このことは、物事の境目に、調和とりズミカルな表現をもたらす輪郭線が誕生する過程において、極めて重要な要素となっています。

教育普及事業 林武史さんのワークショップ「日干しレンガのピラミッド 《月に吠える》をつくろう」

教育普及担当 小藪達也

庭園西に3月19日、新たな作品が設置されました。題して《月に吠える》。作者は「林武史と子どもたち」。岐阜県美術館広しと言えども「子どもたち」が作者として表示されているのはここだけです。

その5か月前、10月16・17の両日で292人の親子が実習棟北に集結。林武史さんからすでに展示してある《立つ人一月見台》とこれからつくる《月に吠える》についての思いや説明を聞いた後、豆腐やカップ麺などの容器に藁土を詰め込み、日干しレンガをつくりました。はじめは恐る恐るだった子どもたちもどんどん大胆になり大はしゃぎ。しかし、それ以上に興奮気味だったのは保護者の皆さん。童心に帰って自ら泥だらけになることを楽しんでいました。トラック2杯分の藁土があつという間にレンガに早変わりしました。

そして3月19日、大災害直後の自粛ムードもあり心配しましたが、128人の親子が来場。黙祷の後、ピラミッド制作開始。当初、林さんとの打ち合わせで「マヤ文明のような階段状のピラミッド」というイメージもありましたが、「子どもたちの創意工夫に任せよう」という温かくうれしいご提案によって、東西南北4チームに分かれテーマを相談。「スカイツリー」「ソファー」「胡坐をかいたおじさん猿」「自由に」と決定するとあとはもう夢中。大人では考えもつかない実にユニークなピラミッドが完成しました。完成後、閉館時刻近くにピラミッドの周りに人影が…。ピラミッドに登って東の空に昇る月を見ながら吠えてみたいという人たちでした。2m近く土を盛っただけと言えればそれだけのこともかもしれませんが、心躍らせる作品、そして創作活動。子どもたちの発想やエネルギーに驚かされた最高の日でした。

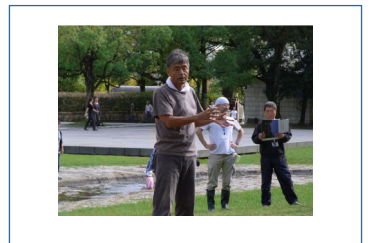
この作品は人々に登ってもらったり雨風に打たれたりすることでどんどん変化しています。「伊藤慶十・林武史」展の後に来館される皆さんも、まだまだこの作品に参加できます。ぜひお楽しみください。

美術館の所蔵品には、作家や遺族、所蔵家等のご厚意により作品を寄贈していただき、コレクションに加わったものが数多くあります。その貴重な「美術館への贈り物」から、平成22年度に収蔵された珠玉の一点をご紹介します。



熊谷守一《はま浪太》1951年作
板に油彩、27.3×33.3cm
平成22年度 杉山幹夫氏寄贈

※この作品は、平成23年度所蔵品展示第1期(平成23年4月12日～7月3日)、第1室「日本の絵画・熊谷守一を中心に」に展示されています。



※このワークショップは、公益財団法人 野村財団助成事業です。

新収蔵作品、お披露目です

平成22年度に美術館が収蔵した作品を、昨年秋から順次、お披露目しています。

この4月からの所蔵品展示では、第3室において、貴重なゴーギャンの自刷りの木版画や、謎めいた二人の男性の横顔をペンとインクで描いたオディロン・ルドン《ダブル・プロフィール》(写真上)が展示されています。

特に《ダブル・プロフィール》は、画家の須田國太郎(1891～1961)の旧蔵品という、ユニークな来歴があります。須田の生前は東京国立博物館に寄託されていました。ご縁があって当館の収蔵品となり、久しぶりの公開です。ルドンのファンの方、必見の作品ですよ！

第1室では、岐阜県付知出身の洋画家・熊谷守一くまがもりかずの特集展示が行われています。新収蔵作品・寄託作品を含め、初期から晩年までの傑作が勢揃い！ 館員も驚く大盤振る舞いの贅沢な展示空間となっております。7月3日(日)までの展示ですが、途中、一部作品の入替があります。

第5室は5月22日(日)まで「花の宴」と題して、花鳥画の特集を行っています(写真下)。ひと味違うアートなお花見が楽しめるかも？ 5月24日(火)からは、爽やかに山水画を特集します。

見どころ多い、この春の所蔵品展示。多くの方々のご来場をお待ちしております。



寄附のお願い—岐阜県美術館の再整備—

開館30周年(平成24年)にむけて展示スペース等を充実いたします。県民の貴重な財産である作品の保全や、皆様の創作発表会場の改善のため、引き続きご支援をお願い申し上げます。

【お問い合わせ窓口】

岐阜県庁内 社会教育文化課

TEL: 058-272-1111(内線 3576)

岐阜県美術館

TEL: 058-271-1313

【参考ホームページ】

岐阜県文化芸術振興基金

<http://www.pref.gifu.lg.jp/kyoiku-bunka-sports/bunka-geijutsu/jigyo/kikinannai/bunkakikin.html>

編集後記

東日本大震災から一ヶ月半が過ぎました。しかし、あまりの被害の大きさに、復興すら未だままならない状況に、心を痛めております。震災と原発事故でこれまでの価値観が大きく揺らぐ中、この過酷な現実において、美術の役割や秘めた力とは何か、そして美術館が果たすべき使命とは何か、問われ続けているように思います。(青山)

お問い合わせ

岐阜県美術館

〒500-8368 岐阜市宇佐 4-1-22

電話番号:

058-271-1313

FAX 番号:

058-271-1315

電子メール:

c27213@pref.gifu.lg.jp



県民文化の森

岐阜県美術館

THE MUSEUM OF FINE ARTS, GIFU

〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22 Tel.058-271-1313 Fax.058-271-1315 URL:http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s27213/